序だから述べて置くが、帖木兒といふのは鐵といふトルコ語で元より彼の本名である。蒙古人や土耳其人に甚だ多い名である。又た彼をタメルランともいふのはチムール、レンクといふ二語を約めて且つ訛つたもので、レンクといふのは跛者の意、卽ち跛者帖木兒といふ言葉である。實際彼はシスタンの戰で足を傷つけて跛になつたが、しかしチムールレンクといふ貶稱は千四百四十年シリアのアラブ・シャーといふ人が、彼の傳記を書いた迄は、決して用ゐられなかつた名である。此の著者の故鄕の地が、帖木兒の爲に蹂躙せられたのを恨みとして、思ひ切つて惡く彼の一生を傳したもので、從がつてかかる好ましからぬ名を用ゐ出したのを歐羅巴にも傳へて、然もそれが轉訛されたものである。

此の年サマルカンドに引き返すや、彼は都を此の地に定めて新たに城砦を築き、寺院を建て宮殿を作りなどして、王都の美觀を添えることに力を用ゐた。當時回教國の都といへば先づ指をカイロ、バグダッドに屈せねばならぬ。しかも此等の都の人がサマルカンドに來て見ては、その繁盛な有樣に羨望を禁じなかつたとのことである。從がつて諸方から此處に移住するものも多く、サマルカンドの名はまた世界に轟くやうになつた。尤も此の都の修飾は彼が一生涯の間常に意を注いだ事業の一つで、後には回教徒の所謂「世界の中心」と迄なるのであるが、とにかく此の頃から既に繁昌を仕出したものである。

七、最後の飛躍

帝王の事業既に就り、殷肆なる都は日にその盛大を逐ひ、今は安逸の天地を貪ぼれば貪ぼり得る境涯に達したの